

第 10 回地域に飛び出す公務員を応援する首長連合サミット in 奈良県生駒市

司会 佐賀県小城市職員 坂田啓子：

- ・オンライン開催に当たってのテクニカルアナウンス
- ・聴覚に障がいがある方でもご参加いただけるよう、福島県聴覚障害者協会の皆様による UD トーク字幕対応

- ・アイスブレイクを兼ねて、チャット機能の練習
「生駒といえば？」「うちの一押し」を各自チャットに書き込み

地域に飛び出す公務員を応援する首長連合代表挨拶 三重県知事 鈴木英敬：

皆さん、こんにちは。

古川元知事や平井知事という大先輩の後を受けて、前回からこの首長連合の代表を仰せつかっております、三重県知事の鈴木英敬でございます。微力ではありますが、参加者の皆さんと一緒にしっかり取り組んでいきたい。今日は土曜日にも関わらず、総勢 138 名の方にご参加いただいている。開催にあたりご尽力いただきました小紫市長はじめ、生駒市の皆さんや事務局の皆さんに、心から御礼を申し上げたい。本当にありがとうございます。

小紫市長のことは霞ヶ関の時からよく存じ上げている。市長になられてからも、副業の許可基準の明確化や、官民プロフェッショナル人材など、面白いことをやまわっている。皆さんとリアルでお会いできないのは大変残念だが、コロナが落ち着いたら生駒にもお邪魔させていただきたい。

今回初めてオンラインでのサミットとなったことで、僕も含めて首長が 18 名、前回や近年の倍近く参加することができた。10 回目という節目にあたり、今後に繋がる重要なサミットだと思う。平成 23 年 3 月からこの首長連合がスタートして、当初 39 名であったのが現在 57 名。加盟首長でしっかり息を合わせて、地域に飛び出す公務員を応援していきたい。

こういうコロナの状況で、各職員の皆さんも地域に飛び出すのは難しい、なんとなく躊躇するような感じかもしれない。物理的に飛び出していなくても、気持ちのなかで、あるいは業務時間内、業務時間外の役割において、ミッションとパッションを持って、ぜひ今だからこそそのやり方で地域に飛び出してほしい。今日は限られた時間だが、皆さんと有意義に過ごしてまいりたい。

開催地首長挨拶 奈良県生駒市長 小紫雅史：

皆さん、改めましてこんにちは。奈良県生駒市長の小紫でございます。

本日は、コロナや大雪の対応など大変お忙しいなか、画面上にご参集いただきまして本当にありがとうございます。

記念すべき第 10 回の「地域に飛び出す公務員を応援する首長連合サミット」ということで、この生駒市に足を運んでいただきたい思いは大変強かった。コロナ禍であっても何とかこういうオンラインの形で開催することができた。ご尽力いただいた事務局の皆様、そしてお集まりいただきました首長、職員、いろんな活動をしておられる市民の方にもご参加いただいた。心からお礼を申し上げます。

鈴木知事の言葉にもあったように、コロナ禍で地域に飛び出すことが、すごくやりにくい時代になっている。しかし、実はこのコロナ禍というのは、コミュニティをもう 1 回強くしてくれるすごく大きなチャンスなんじゃないかと思う。

コロナで大変な時代だからこそ、今までやってきた副業の話とか、地域に飛び出すという意味が、より大きな意義を持つと思う。今日そんなことを皆さんに感じ取っていただいて、明日からもコロナ対応は当然やっていくなかで、地域に飛び出すチャンスを虎視眈々と狙うためのエネルギーにしていきたい。

さっきのチャットで、生駒といえば「宝山寺」と言っていた方が多い。私のバーチャル背景は宝山寺に繋がる階段。生駒市は、ただの住宅都市ではなく、住宅都市と奈良時代から続く歴史文化が融合した素晴らしいまち。ぜひまた足を運んでいただくことを心から期待をしながら、今日の午後は皆さんと一緒に有意義な時間にしていきたい。

来賓挨拶 地域に飛び出す公務員を応援する首長連合提唱者 一般財団法人 地域活性化センター 理事長 椎川忍：

皆さん、こんにちは。こんな大変な中でも、首長連合サミットを開催していただいたことに心から感謝申し上げます。特に三重県の職員の皆さん、生駒市の職員の皆さん、そして全国の飛び出す公務員の皆さんで構成されている事務局の皆さん、本当にご苦労様でした。

思い返せば、平成 20 年（2008 年）に地域に飛び出す公務員ネットワークを立ち上げ、その 3 年後、東日本大震災の年に、地域に飛び出す公務員を応援する首長連合が発足、翌年からサミットが始まった。早くも 10 年経ったというのは、本当に感慨深い。この間たいへん熱心な首長さん方に応援していただき、様々な議論をしていただいたことで、地域に飛び出す活動がしやすくなってきた。本当に感謝を申し上げ

げたい。

今年はこのオンラインの形になった。今回は、残念ながらサミットの名物が二つない。

一つは、長年続けてきた夜なべ談義。もう一つは、司会のもうひと方がおられないこと。

谷畑湖南市長さんが引退されたので、今日は事務局の坂田さん 1 人で司会をやっていただいている。来年以降は、古くから首長連合サミットを支えていただいた、古川衆議院議員や前湖南市長さんもゲストにお迎えして、楽しい会を開催できたらと思う。今日は多くの方に参加していただき、ありがとうございました。心からお礼申し上げたい。

司会 佐賀県小城市職員 坂田啓子：

サミット参加首長 18 名を紹介。

(北から順番に紹介、首長は画面上で手を振る)

北海道東神楽町 山本進町長、

北海道二セコ町 片山健也町長、

山形県南陽市 白岩孝夫市長、

栃木県栃木市 大川秀子市長、

群馬県桐生市 荒木恵司市長、

千葉県酒々井町 小坂泰久町長 (小坂町長は 16 時頃の参加)、

長野県大町市 牛越徹市長、

岐阜県飛騨市 都竹淳也市長、

岐阜県岐阜市 柴橋正直市長、

愛知県高浜市 吉岡初浩市長、

愛知県大府市 岡村秀人市長、

大阪府富田林市 吉村善美市長、

兵庫県朝来市 多次勝昭市長、

奈良県奈良市 仲川げん市長、

奈良県生駒市 小紫雅史市長、

鳥取県 平井伸治知事、

宮崎県木城町 半渡英俊町長、

首長連合代表 三重県 鈴木英敬知事

鳥取県知事 平井伸治 (首長連合 前代表)：

(平井知事は公務退席のため、ここで発言)

皆様こんにちは。

本日は小紫市長様、また鈴木英敬会長様、さらには都竹代表代行、あるいは椎川理事長はじめ全国の皆様、こうしてまたネットでお会いできること、本当に感謝を申し上げたい。また、新型コロナで大変ななか頑張っておられますこと、心から敬意を表したい。

事務局の皆様にお力添えいただき、こういう形でサミットが実現できたこと、何か今後への可能性を見たような気がします。これもいい経験だと思う。多分これだったら普段からできるような気がするし、これを今後に生かして、場合によってはオープンセッションのような形で、多くの方々に見ていただくことも可能かなと思った。ぜひこれから、益々ご発展いただければありがたい。首長も結束硬くやっていければなと思う。

小紫市長から、地域に飛び出すことがむしろ必要なんじゃないかというお話があった。

鈴木知事からは、この会の意義のお話があった。私は、これから公務員にはいろんな顔が求められると思う。例えば、こういうリモートという形もあるかもしれない。コミュニティをどうやって応援するかといったときに、公務員の顔以外の顔も、非常に大事になってくる。

私も今から会議に戻るが、新型コロナで全都道府県巻き込まれている。ウイルスが手ごわいのだと思う。第一波、第二波とは全然違った強さを持っていて、うつりやすい。三重県も寸前のところで頑張っておられて、思い切って県民の皆様に行動制限をかけられた。鳥取県でも、様相は大分変わってきている。ここから数カ月間に、こうした私達の結束が生きてくるのではないかという予感もしている。ぜひみんなの力でこれを乗り越えていければと思う。

幕末に活躍した緒方洪庵は、コレラを治めた方としても有名。適々齋塾には、福澤諭吉や大村益次郎など、その後の志士たちが集まった。まさに今日結束して集まったのは、適々齋塾と言えるかもしれない。その緒方洪庵は「医の道というのは、己のためにあらず、人のためにある」と言っている。

まさにこうやって飛び公で私達が集まり、そして挑戦をしていくことが求められる。どんな困難も私達は超えていくことができると思う。飛び公（サミット）をきちんと作ることができれば、飛びこえる（飛び公エール＝飛び出す公務員を応援する）のであります。

すいません、ネットだとすべってもよくわからないもんですから。（笑）

こんなところで失礼させていただきます。皆さん頑張ってください。

奈良県生駒市長プレゼンテーション「自治体 3.0 の時代に求められる公務員のあり方」

企業ではビジョンやミッション・バリューを定めるところが増えてきて、ビジョンに基づいた組織経営が進んでいる。生駒市総合計画に将来都市像として書いてあるとおり、「自分らしく輝けるステージ・生駒」が生駒市のビジョン。

それぞれの自治体には、いろいろな能力や経験を持った市民がおられる。市民の力をしっかり生かして、地域づくりをしていくのが「自治体 3.0」の基本。そういうまちづくりをしっかりとっていくことをビジョンに掲げている。

シニアの方は、まちづくりにちょっと力貸してよという言い方で、よっしゃよっしゃと言ってくれるところがある。現役世代の方に対しては、まちのために何かやってというよりは、住みたいまちを自分で作っていただくような、そんなアイデアとかアクションをしていただけるのであれば、市役所も仲間作りに協力するし、場合によってはお金も出したりして、応援していきますよという言い方をしている。

聞きたいコンサートを自分でプロデュースする。あったらいいなと思う子育てネットワークを、行政も応援するから自分で作ってくださいとか。図書館がこんな風になったらいいのになっていうのであれば、自分でもそういう活動をしてくださいと。生駒市は、市民の方に動いてもらうというところに主眼を置いている。生駒市を「自分らしく輝けるステージ」として使ってくださいね、皆さんの手でステージをどんどん変えていただいているんですよ、ということでまちづくりを進めている。

ビジョンというのは、主語が生駒市。ミッションは、ビジョンを実現するために生駒市役所がどうすればいいのかという使命。生駒市役所の使命は「このまちで暮らす価値をともに作る」と定めている。

まず一つ目のポイントは、「暮らす」ということ。ただ住むではなくて、ただ働くではなくて、住むとか働くという概念を含んで、日常生活全般「暮らす」という表現に広く捉えている。

ワークとライフだけが人生ではない。ワーク・ライフと、あとコミュニティ、地域というものをしっかりと融合させていくことが、人々の幸せな人生にも繋がるし、まちづくりのプラスにもなる。

このまちで「住む価値を」ではなく、「暮らす価値を」。それを行政が作るということではなくて、市民と共につくる、事業者と共につくる。市内外の専門家の方、大学の方、いろんな方と共につくるという意味で、こういうミッションを掲げている。

生駒市のミッション、「このまちで暮らす価値をともに作る」の背景・根底には二つの大きな考え方がある。一つ目は、もうずっと言い続けている「自治体 3.0 のまちづくり」。

「自治体 1.0」は、接遇もできていないし、社会がどんどん変化していく中で、その変化に全く対応できない

ような自治体。「自治体 2.0」は、市民はお客様であって、行政がどんどん市民ニーズに応えていく。そういうまちづくりを進めていこうと、改革派の市長さんが出てきた。

「2.0 のまちづくり」は決して間違っているということではない。これによって接遇も大変良くなっていくということもあるし、政策競争が起こって、その地域、県内がいろんな自治体の競争によって前に進んでいくということもある。

しかし、市民ニーズがどんどん多様化していく中で、我々が自由に使える予算が減っていく。

自治体職員の数もどんどん減っていく。そして働き方改革の中で、職員の残業時間も当然減らさなくてはならない。市民の多様化するニーズに全部行政だけで応えていくことはとてもできないという時代になっている。

だからこそ、先ほどビジョンのところでも申し上げたように、こんな音楽のコンサートがあったらいいのになとか、こんなまちがあったらいいのになというのを、市民の力をもっともって借りて実現していくことで、市民の皆さんの住みたいまちが実現し、満足度が上がる。

我々も市民の皆様のを借りることができるので、同じマンパワーでより多くのパフォーマンスを上げることができる。市民とともに汗をかいて進めるまちづくり「自治体 3.0」が大切になる。とにかくまちを楽しんで、みんなの課題をみんなで解決していくということに取り組んでいく。

「自治体 2.0」がどちらかというと、隣の自治体よりも何か取り組みを進めて、自分の自治体の方に人を集める、呼び込むというような考え方であるのに対して、「自治体 3.0」は、とにかくまずは市民に定住してもらおうと。生駒市にこれからも住み続けたいという定住意向率を高めていきたいというのが我々の第一目標。今住んでいる人が住みたくないまちに、外から人を呼び込んでも定着しないし、そもそも来てくれないだろうというのは当たり前のことだと思う。

ミッションを支えるもう一つの考え方は、ワーク・ライフ・コミュニティの融合。

生駒市は、まさに大阪のベッドタウンとして大きく発展を遂げてきたまち。昔はどんどん人口が増えて、彼らの市民税・固定資産税で食べていけてた時代。今は、その頃に生駒市に引っ越してきた方、団塊の世代がどんどん退職して、税収も下がっていくという中で、単なるベッドタウンとしてこれから生駒市は生きていくことはできないだろうということで、大きな転換点に来ている。

単なるベッドタウンというのは、まさに寝に帰るまちなので、大阪とか東京で仕事をずっとして、平日はほとんど子どもに会うこともできないというような働き方をしている。仕事か家庭かどっちかみたいな、ベッドタウンというのはまさにそういうまちなんだと思う。

それじゃあかんということで、仕事も家庭もしっかり両立していこうと、ワークライフバランスという考え方が出

きた。ただ、このワークライフバランスも、ある意味、少し時代遅れになって来ていると思う。

人生というのは、仕事と家庭の二つだけではない。ましてや、ワークを増やせばライフが減るとか、ライフを増やせばワークが減るとい、二律背反とい、バランスを取るというものではないんじゃないかというのが私の思い。

ではどうすればいいのかという、ワークとライフの他にコミュニティ、地域の視点。もっと言えば、家庭とも違、自分自身の時間。自己研鑽や趣味の時間、息抜きの時間など。

ワーク、ライフ、コミュニティと、あとセルフ、自己という時間があるのかもしれない。この三つ、ないしは四つをバランスを取るのではなくて、例えばコミュニティに参加することで、ライフの部分も充実する。コミュニティに参加することで何かちょっとした仕事のヒントが得られる。

お互いのシナジーや相乗効果を意識しながら、この三つないし四つのボールをうまくジャグリングすることで、すごく幸せな人生になるんじゃないかと。そして、結果的にはまちづくりもいろんな動きが出てくるのではないかと。ということで、ワークライフコミュニティのブレンド、融合という言い方をしている。

生駒市はベッドタウンから卒業して、多様性を持つまち「ダイバーシティ」になっていこうと思っている。こんなまちづくりをしていくことで、生駒市の定住意向率をしっかりと上げていきたい。ちなみに生駒市の定住意向率は、今 85%ぐらい。これはちょっと自慢してもいい数字だと思っているが、これをさらに上げていくことが僕たちの最大の目標。

今日ここに参加しておられる首長の皆さんは、「地域に飛び出す公務員」をしっかりと応援していこうという同志の皆さん。どのようにしてそれを実現していくのか、またどうしてそういうことをしていかななくてはならないのか、改めて三つ整理してみた。

一つ目は、皆さん方も多かれ少なかれ「自治体 3.0」的なまちづくりを進めている部分が絶対あると思う。市民に汗をかくてくれと言う以上は、二つやらなきゃいけない事がある。

生駒市の職員が、私も含めて本業でしっかり成果を上げて、行政でなくてはできない部分の仕事にしっかりと取り組んで、他の自治体よりも成果を上げて、かつそれをしっかりと市民に発信することが大切だと思う。この発信を結構さぼってるところがあるんじゃないかと思う。職員が頑張っている、市民がそれを知らないと、やっていないのとあまり変わらない。

市民がまちづくりをしていく中の一つの要素として、市役所も頑張っているから俺らもやんなあかんよなっていうところは結構あると思う。発信をしないと、市民の皆様にお互い頑張ろうと、僕らも頑張っているから市民の皆さんもよろしく願いますというような事はなかなか言えないと思う。

職員自身が地域に飛び出すこと。一市民としてまちに出て、まちを楽しむという要素がないと、職員として

は頑張ってるけど、あんまり自治会に顔を出さないよねとか、地域のイベントに全然来ないよねとかだと、なかなかうまくいかないんじゃないかと思う。そういう意味では、職員が地域に飛び出すことで、市民に動いていただくための説得力が違ってくる。

二つ目は、市役所の職員が地域に出ていくことで、役所の中だけでは気づけない新しい発想や取り組みを学ぶことができる。

あとは、市役所の中で、若い職員にも、小さな「自分プロジェクト」みたいなものをやらせようという取り組みをしているが、まだまだ若いうちは裁量や、自主的にやれる取り組みの機会が少ないのが現状だ。ただ、地域に出て行けば、市民団体や地域の活動の中で、「責任者になってくれよ」と任されて、自分の裁量で判断や決断をしながらやっていく経験が積める。

こういったことが、これからの自治体職員に非常に必要な「リーダーシップ」や、0 から 1 を生み出す「始動力」などの育成に繋がる。

最後に、2 番目とも繋がるが、地域に出て行くことで地域のキーパーソンを発見することができること。「職員になったからには、地域の面白い人 100 人と仲良くなれ」という言い方をしているが、地域に飛び出すと、現場のニーズを聞くだけでなく、その解決に良いアイデアを持ってる人や、何かやってくれそうなおっちゃん、おばちゃんを見つけることもできる。

僕 1 人ができることは限られているが、そういう人を 100 人知っていると「チーム小紫」という感じで、できることが増えていく。

生駒市の職員は 800 人いるが、800 人がそれぞれにチームを持ってくれれば、職員の数は減っても、職員を核にしてできることがめっちゃ増える。これを「協創力」と言っている。

この 3 つが地域に飛び出す公務員を応援する主な理由かと思う。

生駒市は神戸市に引き続き全国で 2 番目に副業を推進する取り組みを行った。

最低限の基準みたいなものはあるが、副業をしたいという職員が毎年 20 人ぐらい出て来ており、応援している。

地方自治体で働きたいという民間人材、国家公務員、他の自治体の職員。そういう中に、生駒市で働きたいという方もたくさんいると思うが、「フルタイムで生駒市のオフィスで仕事してください」と言っても、そんなことをしてくれる人は 100 分の 1 とか 1,000 分の 1 とかになる。

なので、テレワークとかをどんどん使ってもらったら良いし、週 1 回とか 2 回でも良いし、と働き方の多様性を持たせたところ、1,025 人の方に応募していただき、そのうち 9 名にご活躍していただいている。

そういう働き方ができる人を募集し、採用しているということは、プロパーの生駒市職員も、副業をしてもいいし、テレワークで働いてもいいということでもある。

場合によっては、週3日だけ4日だけ生駒市職員として働いて、あと1日は違うことをしますっていう職員が出てきてもいいと思っている。

そんな中で、まちづくりのNPOに参加したり、一般社団法人を立ち上げたり、国の情報化アドバイザーになったり、いろんなスポーツのコーチをしたりという人が出てきている。

これは、「副業をさせたい」わけではなく、副業を地域に飛び出す一つの手法として確立したかっただけで、あくまで目的は地域に飛び出す公務員を育てること。そして先ほど申し上げたような、ビジョンやミッションを達成することだ。

最後は、「コミュニティを超回復させよう」というテーマ。

筋トレをしている人は超回復という言葉聞いたことがあると思う。トレーニングをすると一旦筋細胞が壊れて、筋力が落ちるという状態を迎えるが、おいしいものを食べたり、休息を取ったりすることにより、回復する時、筋トレを始める前の状態よりもさらに強い筋肉になる。それが超回復だ。

コロナ禍のコミュニティっていうのは、この、「筋肉が傷ついている状況」だと思っている。

人が集まっているいろんなことをしていこう、市民にもいろいろやらしてもらおうという取り組みをしてきた自治体ほどコロナの影響というのは甚大だ。

生駒市でも12万人の町に約100か所、高齢者の百歳体操だったり、サロンだったり、そういう場所がある。

全部ボランティアの人が立ち上げてやってくれているが、一気に火が消えた。いろんなワークショップ、市がやるイベントだけでなく、市民の皆さんがやったり、市民と行政が力を合わせてやったりするイベントも軒並み延期や中止になっている。もうボロボロで、コミュニティって1回崩壊したような気さえる。

ただ、これってピンチなんだけどチャンスでもあるんじゃないの、というふうに思い始めた。

チャンスの一つ目として、地域活動の大切さが再認識されたこと。

特に現役世代。大阪に通勤してたけど地元で働くようになった方や、子育てで公園行くような方が、ステイホームで行く所がないので近くの公園に行ったら、当たり前のようにすごく綺麗な公園だったのに、草刈りをしてくれてたおっちゃんとかがコロナだから草刈りをやめちゃったから、何か草ボーボーや。そこで「地域のおっちゃんが草刈ってくれてたんだな」っていう、当たり前は当たり前じゃなかったってことに気づく。

二つ目は地元の魅力の再発見。

在宅勤務が増えて、近くの散歩とか公園に行った時に、近くにもこんなに素敵な場所があったんやなど。ステイホームの方が地元の飲食店に食べに行く機会が増えたと。お店の人に聞いても、今まで来てくれなかったような現役世代の方が結構来てくれたって話もしてた。生駒市も「さきめし」という取り組みをして、スマホでクーポンを発行するようなことをやったが、大阪でしか飲み食いしなかった現役世代の方が、地元の店を使う人が増えて地産地消が進んだ。

三つ目はデジタル化。ICT の活用が進んだこと。

例えば、「配るの大変だし、広報紙をネットで配信しよう」という話を議題に挙げた時、今までは「おじいちゃんおばあちゃんはネットで広報誌は読まんやろ」で話は終わった。でも今は、子どもたち孫たちが帰省できないのでオンラインで顔見たいとか、そんなニーズがあって ICT を活用する方が増えてきている。「回覧板は、コロナ大丈夫か」みたいな極端な方もいて、それなら自治会の情報伝達を LINE グループでやろうぜみたいな話もあるぐらい、高齢者だから IT を活用できないっていうのが、タブーじゃなくなった。これを進めれば、今までアナログでやって「自治会活動なんか面倒くさいしなんやねん」と言っていた若者が、ステイホームと相まって、ちょっと自治会活動とか地域に目が向くようになってきてるんじゃないかと思うし、実際、高齢者の方のスマホ教室とか、Zoom の使い方とか、そんなことをやり始める自治会もでてきている。

最後は、現役世代を地域活動に巻き込むチャンスだということ。

ステイホームで家族との時間が増加したり、ロハスな生き方を少し意識する現役世代の方が増えてるんじゃないかと思う。

産業とか事業者が苦勞する中で、ホームセンターだけはめっちゃめっちゃ元気って話もあって、地産地消や、ロハスな生き方のように、少し地に足をつけた生き方に見直すべきじゃないかっていう雰囲気、世の中に少しあるんじゃないかと思う。

そんなことでワーク、ライフはもちろんだが、コミュニティや家庭で過ごす時間が増えたからこそ、自分 1 人の時間も大切だよなっていうのも出てきてると思うので、「ワーク」「ライフ」「コミュニティ」に「セルフ」という四つの軸をうまくブレンドしていくことが大切だろうと思う。

40 代後半から 50 代の方が、人生 100 年時代と言われると、「退職後 30 年間 40 年間、俺は地元でどうやって生きていけばいいのか」って悩んでる方なんかもいて、生駒市も「生駒男会」というベタな名前で「大阪で働くサラリーマンが地元で飲み友達作ろう」という、ただそれだけの集まりをやったら、すごくたくさんの方が入りたいとって来た。

今までコミュニティ作りであり注目してなかった現役世代が、コロナの機会に地元でいざ目が向いてるということ。

こういったことは、大きなチャンスなんじゃないかと思う。

コロナっていうのは、地域に飛び出す公務員や我々にとって、飛び出していく場所や機会がないという意味ではピンチだが、第三波を乗り越えた先に、コミュニティを元に戻すのではなくて、超回復させるチャンスでもある。

そのためには現役世代が地域に目を向けていること、高齢者でも ICT を使ってもらえるかもしれないということなんかをうまく使いながら、超回復させる工夫が大切と考えている。

ご清聴ありがとうございました。

【自治体職員による事例発表】

コーディネーター 奈良県生駒市職員・(株)HOLG 代表 加藤年紀 :

皆さん、こんにちは。

このセッションでは、実際に地域に飛び出している方に、どんな流れで外に出ていったのか、どんな課題があったのか、といったところをお話していただきたいと思っている。

僕自身、首長連合には株式会社 HOLG という団体で開催している「地方公務員が『本当にすごい！』と思う地方公務員アワード」でご後援いただいたり、逆に我々の方で「地域に飛び出す公務員アワード」を応援させていただくなど、非常にお世話になっている。

公務員個人の力が世の中に対して大きな影響力を持ち始めているなというふうに思っており、このような取り組みで公務員を応援できることは非常にありがたいと思っている。

生駒市には 2019 年 4 月から参画させていただいてるが、自分自身が公務員の籍を持ってこのような活動にかかわるとは思っていなかったのも、両方の目から皆さんに思ってることを率直にお伝えできればと思っている。

では早速、沖縄県の森田さん、群馬県の宮下さん、生駒市の和田さんの順に発表をお願いしたい。

事例発表 1 沖縄県中央児童相談所職員 森田修平～児童虐待防止の取組～ :

沖縄県庁職員として 12 年目。沖縄県中央児童相談所で児童福祉司をしている森田修平です。よろしく。

その前は児童自立支援施設で非行っ気がある子たちと一緒に寝泊まりを共にして生活してきた。また、中央児童相談所では、一時保護所、児童福祉の中期的・長期的支援のグループ、虐待対応のグルー

プなどでも勤務した。

先日は、HOLG が主宰する「地方公務員が『本当にすごい！』と思う地方公務員アワード 2020」を受賞させていただいた。

僕は、平成 29 年に、業務の傍ら「沖縄の子どもと家族・支援者の未来を明るくする会（以下「ocfs）」という団体を立ち上げ、代表として研修会の企画運営、児童虐待防止啓発イベントの開催などを実施してきた。「教育と福祉をもっと気軽に繋ぐ必要がある」と強く思っており、教育と福祉のバスツアーも企画し開催した。

また、一人一人に「児童虐待問題を自分事として捉えていただきたい」という思いも強く、さらに、考えるだけでなく、一歩先へ行動していただくために「地域円卓会議」というのを開催してきた。

それぞれ紹介したい。

沖縄県の現状を簡単に説明する。

沖縄県の中には全 41 市町村があり、僕が勤務している中央児童相談所は、7 市 7 町 7 村を管轄している。沖縄は、貧困率、中学校卒業後の進路未決定率、高校進学率、中途退学、若年の無業者、若年妊婦、そういった数字が全国に比べて悪く、大変深刻な状況だと思っている。

そういった中で僕たち現場で働く児童福祉司、児童自立支援専門員、県の福祉行政で働く仲間、養護教諭。そういったメンバーで団体を作った。

2 ヶ月に 1 回の勉強会と「子どもにかかわる支援者と子どもたちのためのコンテナハウス」も運営している。

私たち ocfs は 4 本の柱をもとに活動中です。

メンバー一人一人の個性がものすごく強く、まとめるのは大変だが、このメンバーだからこそいろんな発想を持っているんな取り組みができています。「いろんなことをやりたいよね」という話をずっとしている。

「沖縄の子どもと家族・支援者の未来を明るくする会」の名前の由来だが、まず、僕が住んでいる沖縄県の子どもたち。

ただ、僕は「子どもだけが笑顔になって、それはいいのかな」とすごく悩んでいて、やっぱり家族も笑顔にならないといけない、と。

でも、子どもと家族だけが笑顔でいいのか。そこもまた疑問になって。

やっぱり支援をする児童相談所、市町村の家庭福祉、児童養護施設の職員など「支援者」と呼ばれる方々もやっぱり笑顔になってほしい、笑顔であるべきだと思って、この名前にした。

「ocfs」はそれぞれの頭文字。マークの三つの円に「子ども」「家族」「支援者」という意味を込めて重ね合わせている。

このメンバーで「なぜ虐待問題、不適切な躰というのが減らないのか」と考えた結果、次の三つが大きなテ

ーマと思っている。

一つ目は、支援者も当事者も余裕がない。

保護者や支援者の余裕がない時、子どもたちにどう接しているか。

やっぱり気づかぬうちに声が大きくなっていたり、厳しい言葉を言っていたり、一言一言で傷つけている状況があるんじゃないか。そういったことを伝えていかないといけない。

支援者だから、福祉の専門職だからパーフェクトではなくて「虐待は身近にある」ということを伝え、正しい知識を、どんどん発信していきたい。

二つ目は、実践ができていない。

講習会、勉強会、いろんなところで児童福祉部門、発達障害とか、愛着障害とか、そういった分野で勉強会・講演会があるが、インプットだけでなく、アウトプットしないと実践力が身に付かないということを感じている。そういった実践の場を作っていきたい。

三つ目が、繋がる場が少なく孤立化している。

コロナ禍もあるが、気軽な連携というのが少ないと思っている。

飲み会では、「思いは一緒なんだこの人」と思って、組織としての「教育」と「福祉」になるとギスギスするような事例もあった。気軽に繋がる場っていうのを作りたい。

僕たちが勉強会をしたのが、「不登校になるためには」というちょっと面白いテーマ。

「何をやったら不登校になるだろう」と考えると、「そこに手を差し伸べれば不登校にならなくて済んだかも」という発想になる。これを踏まえてそれぞれ目の前にいる子どもや保護者と接して欲しいと思って勉強会等してきた。

コンテナハウスというのは、SNS を通して、家庭で不必要になっている物品を寄付していただいて、本当に必要としている方々に提供していくもの。沖縄県には若年妊婦の子たちも多いので、孤立化しないよう、「必要なものはないか」というところからコミュニティに入って行く。こういった活動で、物品を通して繋げていたり、こういった所があるからねと紹介をすると、気軽にまた連絡していただけるのかなと思っている。

「地域円卓会議」というものを開催している。

「企業、行政、地域、学識、メディア等、多様な主体が連携して、テーマを共有してアイデアとネットワークを持ち寄り、課題解決を目指して議論する対話の場」で、上座が無く皆がフラットな状態でいろんなことを話す。浦添市長も一緒に参加していただき、「児童虐待を減らすために地域でできることは」というテーマで話をしたこともある。

福祉だけではないと思うが、バトンタッチでは切れてしまう支援があるので、のりしろ型の支援ということで、ど

ここにどう繋げていっていかってというのをみんなで考えた。

教育と福祉をもっと繋げたいというところで、教育と福祉の合同バスツアーを業務外で企画運営し、学校にも足を運んで、福祉関係 15 名、教育関係 15 名が参加してくれた。大学生や記者さんも来ていただいた。

訪問先に一緒に行って、バスの中では、先生方の目の前にいる子どもたちがそうならないよう、先生方がどうキャッチするかみんなで考えましょうということで、職種を越えた連携もやってきた。

僕たちは今、「学校用虐待発見記録用紙」というものを考えている。

これから学校、保育園、幼稚園などいろいろなところで活用されれば、もっともっと教育と福祉が連携して情報共有もスムーズにできて、いち早く子どもたちを守れるんじゃないか、大きなことになる前に対応できるんじゃないかと思って、作成している。これもどんどん広げていきたい。

僕たちは、教育・福祉の繋がりをもっともっとやっていきたい。

二つ目、SNS をもっともっと活用して情報発信するだけでなく、情報も支援も繋ぎたいと思っている。

そしてコンテナハウスの活動継続。

様々な活動を通して、いろいろなニーズがどんどん出てきているからこそ、僕たちも色んなことをやりたいという思いがあるので、これをアップデートしながら活動を継続していきたい。

子どもと大人が笑顔になるには、職種を超えて繋がり、地域の繋がりを大切にする必要がある。

一人一人が笑顔になるまちづくりというのを沖縄県として発信していきたいと思っている。

ご清聴ありがとうございました。

コーディネーター 奈良県生駒市職員・(株)HOLG 代表 加藤年紀 :

森田さんありがとうございます。

続いて、群馬県の労働政策課係長の宮下さんよろしく申し上げます。

事例発表 2 群馬県労働政策課職員 宮下 智～公共空間の利活用等～ :

群馬県庁の宮下です。よろしく申し上げます。

「ウィズコロナ時代のまちづくり」ということで事例発表します。

私は群馬県太田市生まれの 48 歳。

今県庁の労働政策課で、障害者の就労支援をしている。昨年、地方公務員アワードと企業の協賛賞というのを三つ、もらった。

左下の写真はその結果を知事に報告しているところ。

私が今取り組んでることの中で「base on the green project」という公共空間を使った取り組みについて話をする。

これは普段使われてない公共空間を活用してマーケットを県内各地でやっているもの。

2018 年に本格的にスタートして、今、だいたい 40 回以上開催してきた。

この取り組みのビジョンは、「地域に根ざして私たちの手で豊かな暮らしを作ろう」ということ。

これからは未曾有の人口減少社会となり、逆に遊休不動産はどんどん増えていく。公と民が連携して、その公共空間を使ってどんどん利益を生み出しながら地域を発展させていくような地域経済循環のモデルケースを作っていきたい。

きっかけとなったのは 2017 年に綺麗な芝生の群馬県庁前広場でやったナイトマルシェ。

県庁内で募った仲間と県内各地の民間の方々との協力を得ながら開催した。3 時間で 1000 人以上が来てくれて、県の予算はゼロでやった。

この取り組みは、県民、出品者、県庁、すべてメリットがある三方よしの取り組みだということで、県の幹部にプレゼンをしたが、芝生が痛むからあそこでイベントやっちゃ駄目よということになってしまった。

しかし、諦めずに、民間側でメインになってくれた方と、僕と僕の後輩でこの base on the green project というのを立ち上げて、地域にいわゆる飛び出していった。

これは伊勢崎駅前の普段使われてない広場だが、ここで夏休みの間、毎週金曜日にマーケットを開催している。

前橋市民文化会館前の使われていない空間でも、マーケットをやると、近所の人たちが遊びに来てくれる。桐生市の新川公園でも、僕の民間の友人がメインで、同じ base on the green という名前でマーケットを開催してくれている。

この取り組みは新潟県まで飛び火し、一昨年、新潟県庁前でもナイトマルシェが開催された。

この取り組みを、どんどん各地に展開し、地域に根ざした豊かな暮らしを作っていきたいと考えている。また同じような思いを持つ人の、初めの一步をどんどん後押ししていきたい。

もう一つお話しするのは、仕事の取り組みなのだが、県庁官民連携まちづくりチームについて。

これは部局横断で官民連携のまちづくりを進める、特命のプロジェクトチーム。

これも公共空間の活用方法を変えて、まちにインパクトを与えたり、公共空間で稼げるシステムを作ろうということで行っている。

これが桐生の県道で、桐生の民間の方と、まちづくりチームでコラボしたマーケット。

一昨年の夏に 3 回ほど開催した。行政としてこの歩道が使いやすいように、道路の占用の許可の基準を変え、自分たちも民間の人たちと一緒にマルシェを開催していくということでやっている。

これは前橋でやったときの例。

桐生は歩道だけではなく、クリスマスには車道も止めてマーケットを開催。桐生市にもすぐご協力をいただきながら進めた。

私たちがやっていることは、補助金イコール税金を使わずに、志を持った民間プレイヤーの方と連携して地域経済循環を作っているということ。これは、人口減少社会でも持続可能な地域づくりであり、また人づくりだと考えている。

新型コロナウイルスにより、イベントは中止に追い込まれてしまったが、私たちの取り組みは、3 密とは程遠い、普段使われていない公共空間で行っている。コロナは飲食事業者にとって危機。市民も安全に楽しめる場を作る必要もある。なので、今こそ価値を発揮する時だろうと考え、新しいチャレンジをスタートさせた。

これが去年の 4 月、緊急事態宣言が出たばかりの時に、まず県庁前キッチンベースということで、飲食店さんにキッチンカーで来てもらい、県庁職員で買い支えようという取り組みを行った。base on the green project とまち作りチームと群馬県庁の 3 者のコラボ事業のスキームを作り、今も続いている。

こんな形でソーシャルディスタンスを取りながら、お弁当を買ってもらう。

1 日に 100 個以上は売れ、コロナが落ち着いた時期以降は、一般の方にも開放している。

夏からは県庁前サンセットキッチンベースという、コロナに配慮した形での夜のマーケットも 5 回ほど開催し、イベントの再開の機運を高めたり、ここで一杯飲んで、まち中に出て行って飲食店を支援しようという流れを作った。

プライベートの方も伊勢崎駅前、夏休みの間は週 2 回、金土に増やした。ニューノーマルに対応したマルシェをやって、回数を増やした事で来場者も分散させて実施している。

まちづくりチームのほうでは歩道空間も活用した県道を使ったオープンテラスの社会実験を継続中。

今は本当に経験したことないコロナ禍なので、何もしないのが正解なのかもしれないが、地域経済をまわすために、ここは自分たちが勇気をもって一步を踏み出し、前例を作っていくしかないと考えている。base

on the green のビジョンは、「地域に根ざして私たちの手で豊かな社会をつくること」、コロナ禍の今こそ実践する時だと思っている。

自分が普段から心掛けていることは、まずはやってみること。やり続ける限りは失敗にはならないと思っている。後はやっていることを楽しくどんどん発信していく。そうすると情報や仲間が集まってくるということを実感している。

取り組む基準は、自分がまずすぐワクワクすること、やりたいと思うこと。そして周りに一緒にやりたいと思う仲間がいるか。これが重なったものをやることにしている。かつ、それで自分が成長できれば最高。

最後になるが、今を全力で楽しみながらチャレンジを続けることで未来が開けると思っている。そして自分が幸せになるような暮らしを作っていくことが結果的に地域を豊かにすることに繋がると思っている。皆さんも同じ思いを持つ仲間を見つけて、ぜひ小さな一歩を踏み出して、地域に飛び出してほしい。

コーディネーター 奈良県生駒市職員・(株)HOLG 代表 加藤年紀 :

宮下さんありがとうございます。

小さな一歩というのがいい。この後そのあたりもうちょっと深掘りしたい。

続いて、生駒市市民活動推進課係長の和田さん、事例発表をお願いします。

事例発表 3 奈良県生駒市 市民活動推進課職員 和田 真人～レンタル何でもする公務員～ :

和田真人と申します。よろしくお願いします。

まず、簡単に自己紹介してから、豊明で行った egao 家の話、そして生駒市で行った「レンタル何でもする公務員」。これらの事例紹介を通じて、経験則上のメッセージを伝えることができると思っている。

愛知県豊明市役所に 18 年間勤め、その後、奈良県の生駒市役所に転職し、今に至る。

「すごい人なんですよ」とよく言われるが、全然すぐくない。中 1 の時はオール 2 だった。

高校で、中央大の指定校推薦の内定を得たが、原付に乗っているのがばれ、親呼び出しの免許没収、そして一浪で愛大に入った。本田技研の集団面接では、空飛ぶクルマが流行ると思っており、それをテーマにあげたらアウト。KDDI もこんな学歴なのに、最終面接まで来たが、絶対に笑ってはいけない場所で緊張のあまり声を出して笑ってしまいアウト。

そして入った光通信。あまりの体育会系に 1 週間で退職し、職歴からも抹消した。

その後、豊明市役所に何とか入れていただき、豊明では合コンの毎日。
こんな私でもまちづくりはできる、それを今日はお伝えしたい。

日本一真面目な変態公務員を目指している。変態という語弊があるかもしれない。
しかし、今後ますます答えがない時代になってくる中で、人と同じ、周りと同じことをしては、同じかそれ以下にしかない。
いかに自分で本質を捉え、しっかりと話し、自分で考え自分で行動し、そしてそれをブラッシュアップしていくか。そのような流れが今後ますます大事になると考えている。
そのような公務員らしからぬ公務員、そんな変態公務員を真面目に目指している。

最終的にはこの一つ、やるかやらないかだけ。そして始めた豊明での egao 家は挑戦だった。
なぜ豊明で egao 家が始められたか。いろんな団体、いろんな人たちの思いが、がちっと合った。偶然の必然だった。
場所は、四軒長屋の空き店舗。写真の一番奥は八百屋さんで、撤退寸前。建物のオーナーも八百屋さんがいたら、この建物をつぶす予定だった。
まちの人に火がつき、普段は町の方がワンデーマスターとなり、コーヒー1杯から始まるまちづくりをされている。
写真の一番奥、あけみさん。
まちのマスターというよりは、まちのスターで、この方を目当てに毎日大勢の方が来る。
月曜日から金曜日まで2、3人の方がマスターとなっている。

egao 家の目の前には大きな公園があり、そこで月1回、軽トラ市が開催されている。その軽トラ市に合わせ、egao 家では昼飲み会を開催。まさに複合型コミュニティのはしりである。

豊明には藤田医科大学という全国に誇る大学があり、その学生たちも egao 家の活動に参加をしてくれている。最近の大学生や小さい子どもたちは一人っ子が多いので、肌と肌、人と人が繋がる時間がとても大事だと考えている。成人式でからんだ大学でデザインを勉強している子が、egao 家のリノベーションを手伝ってくれた。若者が作る新たな egao 家の始まりとなった。

なぜ egao 家ができ、そして今も成功しているか。なぜ私が町の人たちに受け入れられたか。
それは、今を見ていたから。その時々、刹那刹那に、目の前のことに100%の力で集中していたから、まちの人たちに抱きしめられたと思う。

そんな中、egao 家の発展形を NPO 法人として作りたいという思いが芽生え、職員をしながら、兼業副業ができる生駒市に転職した。
しかし、誰も知らない、何も知らないまちで、本当に最初はつらくて無我夢中だった。

生駒に来て、大きな失敗を感じた。それは先を見過ぎていたことだと思う。

まちづくりではとにかく人と繋がろうと思ってた。

そんな浅はかな思いで入った消防団と太鼓の団体がある。「この人と繋がれば、こんなことができるんだろうな」そんなようなことばかりを思って活動していた。なのでまちの人たちも「こいつはちょっと様子見だな」と見られていたと思う。

そして、無我夢中で始めた「レンタル何でもする公務員」。誰でもすぐできるゴミ拾いから参加し、草刈り、ちょっと畑を手伝ってと言われて行ったら開墾だった。

グランドレベルの田中元子さんがされているフリーコーヒー。一杯のコーヒーを振る舞って、まちの人とお喋りを楽しむもの。私も旅館の一角を借り、宿泊者の方に、ひきたてのコーヒーを振る舞っておしゃべりを楽しんだ。

「ちょっと楽団の裏方を手伝って」と行ったら、60人ぐらいの楽団をバックに、ゆずの『栄光の架け橋』を歌わせていただくことになった。

いろいろやりすぎた結果、逆に何もしない場所って面白いんじゃないかなと思って作ったのが「みんなで何もしないバー」。

単なる焚火だけだったが、本当に面白い場所になった。ダッチオーブンを作って持ってきてくれた人。ロケットストーブを持ってきてくれた人などがいた。

そんな人たちと1000人集まって飲んだら面白い場所になるんじゃないかな。そう思って始めた1000人飲み会は6人しか集まらなかった。

このような活動を通じて感じたのは、マーケティングをしていたのではないかということ。

目の前の自分のまちを見ながら、目の前の人を見て、どういうニーズがあるか、どうしたら役所の事業を効果的に落とせるかを、プライベートで勉強させてもらっていたと思う。

そして再度自己分析、自分を見つめ直した。私は何が好きで、何をしたいのか。真っ先に浮かんだのは、やはり合コンだった。でもなぜ合コンが浮かんだのか。楽しい場所を作りたいんだなと思った。1人でも多くの人笑顔になるような場所。そういった場所を自分は作れるし、これからも作っていきたくて改めて気付いた。

そこから考えた今年の挑戦は「一杯のビールから始まるまちづくり」。

飲みニケーションは、まちの人との最高のコミュニケーションツールだと思っている。

egao家の皆さんに教えてもらったことだ。

もう一つある。

子どもの、「どうせ無理」を変えたい。子どもは大人たちの背中を本当に見ているので、まちで楽しむ大人をもっともっと増やして、将来ある子どもたちが「この町で、もっと面白いことをしたい」と思えるように育てていき

たい。

アップルの創業者スティーブジョブスの言葉。

「もし今日が人生最後の日だとしたら、今やろうとしていることは本当に自分のやりたいことだろうか？」

「皆さんのまちで楽しいことを一緒にしましょう」

ご清聴いただきありがとうございました。

コーディネーター 奈良県生駒市職員・(株)HOLG 代表 加藤年紀 :

最初、漫談が始まったのかなと思った（笑）

笑いから入って感動的などころに行って、最後笑いで落とすという、素晴らしい講演のような形だった。

ここからは今事例発表いただいた皆さんに、もう少し深掘りしたい。

20分という限られた時間だが、チャット欄に質問をいただけたら、その質問も皆さんにお伺いできればなと思っています。

まず、私からお聞きしたいのは、地方公務員が今、忙しい中で地域に出て行くということも大変ですし、住民の方の目、役所の中の目も気になり、なかなか踏み出す勇気が必要だったりと思うが、その辺り含めて少しお聞きしたい。

まず、森田さんが外に出て行くデビューのきっかけを教えてくださいませんか。

沖縄県 中央児童相談所職員 森田修平 :

僕は、行政というより、福祉というところで、子どもたちが困っていることからスタートするので、逆に閉じ込められていると何も解決できない。外に出ないと逆に改善されないの、出て行こうという発想だった。

コーディネーター 奈良県生駒市職員・(株)HOLG 代表 加藤年紀 :

自分の仕事をプライベートの中でも成果に繋げていこうと出て行ったのが大きかったということですかね。

沖縄県 中央児童相談所職員 森田修平 :

そうですね。

コーディネーター 奈良県生駒市職員・(株)HOLG 代表 加藤年紀 :

ありがとうございます。

宮下さんの場合はどうですか。

群馬県 労働政策課職員 宮下 智 :

私の場合は、5 年前に仕事でまちづくりの担当になったときの部下がめっちゃくちゃアクティブで、一緒に連れ出されたような感じ。県内各地いろんなところにいる面白い人に会いに行って、地域の人と繋がる楽しさを知った。

県庁前でイベントをやった時は、うまく組織の壁が崩せなくて、仕事としてはできず自分の中でも葛藤があった。組織でやって駄目だったことを外でやっていいのかという葛藤があったが、思い切って、覚悟を決めて、地域でやることにした。

コーディネーター 奈良県生駒市職員・(株)HOLG 代表 加藤年紀 :

ありがとうございます。

和田さんはどういっきっかけで地域デビューしていったんですか。

奈良県生駒市 市民活動推進課職員 和田 真人 :

親と実家で飲んでいる時に、父親が、いわゆる老人ホームに捨てられておしまいという話をしたことがきっかけ。老人ホームと幼稚園を合体させた多世代交流などの場所をまち中に増えている空き家空き店舗を活用しながらやれたら面白いんじゃないかなと思った。

たまたま子どもが入った幼稚園のお父さん連中が、青年会議所の方が多く、私も青年会議所に入らせてもらって、まちづくりに入っていった。

コーディネーター 奈良県生駒市職員・(株)HOLG 代表 加藤年紀 :

ありがとうございます。

今度は順番を逆にしてお聞きするが、和田さん、外に出て行ったときに、その時所属していた組織内外、それぞれどんな反応がありましたか。

奈良県生駒市 市民活動推進課職員 和田 真人 :

当時新聞にも載せてもらったが、組織内は全くと言っていいほど反応はなかった。

しかし、一緒に活動してくれる役所の職員や、以前の部署で知り合ったちょっと怖かった人が、私の部署の窓口に来てくれて、お前、よくやってるなど褒めてもらったのは本当に嬉しかった。

コーディネーター 奈良県生駒市職員・(株)HOLG 代表 加藤年紀 :

ありがとうございます。

皆さん同じ質問になるんですが、いかがでしょうか。

群馬県 労働政策課職員 宮下 智 :

私も和田さんと一緒に、組織の中は反応無い。

新聞に出たりした時とかにも、職場でのリアクションは薄いですが、活動のために休暇を取るの自由をさせてもらっているし、何も言わないということは逆に認めてもらっているのだろうと思う。

今は大分色んなところで取り上げてもらい、声をかけてもらうことも多くなってきた。

外に関しては、やっぱりやればやるほど、まちづくりで繋がった仲間が応援してくれたり、イベントに顔を出してくれたり、そこから次の展開が出てきたり、反応はすごくいい。

コーディネーター 奈良県生駒市職員・(株)HOLG 代表 加藤年紀 :

ありがとうございます。

チャットで今村さんから質問をいただいている。まちづくりのチームみたいなのは、どういうきっかけで作りました

か。

群馬県 労働政策課職員 宮下 智 :

まちづくりのチームのきっかけは、県庁前でナイトマルシェをやったメンバーが、同じ思いを持ってくすぶっていたのを行動に移して、最終的に県土整備部というところのオフィシャルなチームができたみたいな事かなと思っている。

それは自分がメインじゃないが、県土整備部に所属しているメンバーが、丁寧に組織の中を調略、攻略して、オフィシャルなチームを作り上げてくれた。

コーディネーター 奈良県生駒市職員・(株)HOLG 代表 加藤年紀 :

高浜市の吉岡市長からもチャットで質問をいただいている。その延長線上で繋がりが大きく広がっていったのは、どんな広がりを見せていったのか。

群馬県 労働政策課職員 宮下 智 :

例えば最初、県庁前ナイトマルシェをやって、その後プライベートで伊勢崎で始めたら、今度は民間の友人が、桐生でも同じ base on the green をやりたいと。そのノウハウとか、桐生市役所さんを説得するのを一緒に行ってくれないかみたいな話があって、それが伊勢崎市から桐生市に移植されたイメージ。

そこの手伝いももちろんチームのメンバーでしていく。

それがさらに新潟県まで同じものが輸出されたみたいな、そんな広がりが結構出てきた。発信すると、それをキャッチしてくれる人がいて、うちらもやりたいみたいな形になっていく。

そういう志を持った方がいれば、自分たちが応援して実現まで結びつけるみたいな広がりの方ですかね。

コーディネーター 奈良県生駒市職員・(株)HOLG 代表 加藤年紀 :

先ほど、生駒市の小紫市長も発信が大事だと言っていました、自分たちがやっていることを発信する事で、周りから声がかかってくるっていうところが良いサイクルなのかもしれない。

続いて森田さん、実際動かれてみて組織内外の反応はどうでしたか。

沖縄県 中央児童相談所職員 森田 修平 :

組織内では、最初はすごく頑張ってるねっていう感じではあったが、無関心だった。、
児童虐待問題に特化してやっていると思われているので、今はすごく応援者が多いのかと思っている。
先ほど話したコンテナハウスという所で、物品集めをしているので、業務内外で、「森田さんこんなのないで
すか？」というような話があって、そういった繋がりが大きくなってきているのかなと感じている。

コーディネーター 奈良県生駒市職員・(株)HOLG 代表 加藤年紀 :

ありがとうございます。

続いてチャットの質問ですが、皆さんお忙しい中でどうやってやっているんですかとか、家庭の調整も含めて
どうやっているんですか。

地域活動を継続していくためのポイントですとか、モチベーションの保ち方みたいなのところについて、森田さん
はどういうことを意識されてますか。

沖縄県 中央児童相談所職員 森田修平 :

モチベーションは、沖縄県の子どもたちを全員笑顔にしてやるという思いしかない。

コーディネーター 奈良県生駒市職員・(株)HOLG 代表 加藤年紀 :

最高ですね、すごい。

宮下さんは、どうですか。

群馬県 労働政策課職員 宮下智 :

僕は、自分がワクワクすることを、やりたい仲間たちと一緒に楽しくやるっていうのが継続しているポイントか
なと思う。

コーディネーター 奈良県生駒市職員・(株)HOLG 代表 加藤年紀 :

ありがとうございます。

野洲市で困窮者支援されている方から、あまり明るいイメージはないような業務でも、発信して楽しそうなことをやっていると人が集まってくると聞いた。

地域活性じゃないところでも、やってる人がワクワクしている感じを発信していくことが大事かもしれない。

ありがとうございます。

続いて、和田さんいかがですか。

奈良県生駒市 市民活動推進課職員 和田 真人：

プライベートでまちづくりというと、できない事の方が多いと思うのですが、2、3人でも場を作って来てくれたりとか、「ビール作りから始まるまちづくり」をフェイスブックに上げたときに、生駒市役所に出入りしてる業者さんが「私も前々からビール作りをしたかったんです。是非、私も出資しますから一緒にやりましょう」とわざわざ言いに来てくれた時は、本当に感動だった。

できることに目を向けるっていうのが大事なかなと思う。

コーディネーター 奈良県生駒市職員・(株)HOLG 代表 加藤年紀：

ありがとうございます。

他にもチャットの質問が来ています。「活動資金は足りていますか？」ということですが、和田さんが活動をしていく中で、資金が必要になってるケースはありますか。

奈良県生駒市 市民活動推進課職員 和田 真人：

特にはないが、最近買ったのは、2万円の草刈り機。

カインズで、1時間ぐらい悩みながら買った。

自分でできる範囲でやっていけばいいんじゃないかなと思う。

コーディネーター 奈良県生駒市職員・(株)HOLG 代表 加藤年紀：

ありがとうございます。

森田さんは、活動に対して資金はどうされていますか。

沖縄県 中央児童相談所職員 森田修平 :

発信し続けることで、一般企業の方々や弁護士会とかが、僕たちの団体に寄付や寄贈をしたいと言ってくれて、今何とか繋がっているのかなと思う。

コーディネーター 奈良県生駒市職員・(株)HOLG 代表 加藤年紀 :

それはどうやってその繋がりができて、資金提供をいただくまでに至ったのですか。

沖縄県 中央児童相談所職員 森田修平 :

活動をずっと続けることで、多職種連携で弁護士さんと繋がったり、SNS で発信し続けることで一般企業の方に見ていただいて、児童福祉分野に情報がなくて困っていた時に、繋がりの繋がりで「こんな団体があるよ」と紹介をいただいたり、そういった繋がりで。

コーディネーター 奈良県生駒市職員・(株)HOLG 代表 加藤年紀 :

ありがとうございます。

宮下さんは、どういう動きで資金を獲得できているのか教えていただきたい。

群馬県 労働政策課職員 宮下 智 :

マーケットに関しては、出展者さんから出店料をいただいて、その範囲でイベント保険料などを払ったり、マーケットのための机やテーブルを買っている。

また、発信も SNS でやればお金はかからないので、収入の範囲で支出をして、マイナスにならないように事業をやっている。

コーディネーター 奈良県生駒市職員・(株)HOLG 代表 加藤年紀 :

ありがとうございます。

「やはり発信していると見つけてくれるんですね」というチャットのコメントが来ています。皆さんやっぱり発信という話が続いてるかなと思うが、一方で公務員って結構叩かれやすい部分もあって、公務員が遊んでるんじゃないよとか、何やってんだよって言われるリスクも場合によってはあるのかなと思う。

和田さん、発信のときにうまく広がっていくために気をつけている事があれば教えていただきたい。

奈良県生駒市 市民活動推進課職員 和田真人 :

当然ですが、違法なこと、仁義に反するようなことはしない。あとは自分の好きなことをやっていると、それが人のためになって、ひいてはまちのためになるという、そういった視点で活動をしているつもり。

コーディネーター 奈良県生駒市職員・(株)HOLG 代表 加藤年紀 :

ありがとうございます。

森田さんの場合、批判は受けづらいような気がするが、発信のときに意識していることはありますか。

沖縄県 中央児童相談所職員 森田修平 :

やはり個人情報はずごく意識している。子どものためにということで打ち出すと、そこまで批判はないのかなと思っている。

コーディネーター 奈良県生駒市職員・(株)HOLG 代表 加藤年紀 :

ありがとうございます。

今回のサミットの中で、地域に出て行く事の意義が伝わればいいなと思っているが、お三方から改めてお話をいただきたい。

沖縄県 中央児童相談所職員 森田修平 :

僕は子どもの笑顔のためっていうのが一番なんですけど、施設でもそうだったんですけど、自分がやっている仕事はものすごく対処方法が多い。

今回飛び出したことによって、自分の業務がちょっとは楽になっているのかなという感覚はすごくある。

やっぱり地域の方々が児童虐待問題にすごく力を入れてくれている感覚を僕は持っていて、そういったとこ

ろが、飛び出すことが自分の業務にも少し楽になってくると感じているところなのかと思う。

コーディネーター 奈良県生駒市職員・(株)HOLG 代表 加藤年紀 :

ありがとうございます。

あまり意識せずにやれてたっていうのがすごいことだと思う。

続いて宮下さん、お願いします。

群馬県 労働政策課職員 宮下智 :

自分の場合は自分の成長のためというところがすごくあって、外へ飛び出していくいろいろな人脈ができた
り、そこでしか得られない経験というのがすごく積み重なっていく。

結局自分が成長すると、それが仕事にも跳ね返ってきて、その繋がりをもって仕事の成果も絶対上がって
いくと思うので、それが最終的には自治体のため、県民のためになるんじゃないのかなと思う。

コーディネーター 奈良県生駒市職員・(株)HOLG 代表 加藤年紀 :

ありがとうございます。

最後に和田さん、お願いします。

奈良県生駒市 市民活動推進課職員 和田真人 :

私は自己実現かなと思っている。

マズローの欲求 5 段階じゃないけど、人それぞれ自分がやりたいことがあるはずだと思う。

役所の仕事というのは決められたことが多いと思うが、そのような中で地域に飛び出していくと、自分がやり
たいことが見つけられるし気づくし、ひいてはそれがまちづくりに通じると、仕事にも通じて、まちの人とも一緒
に対等に話せて、より良いまちに進んでいくんじゃないかと思う。

コーディネーター 奈良県生駒市職員・(株)HOLG 代表 加藤年紀 :

ありがとうございます。

チャットで質問が来ています。

こんな取り組みや、職場でこんな支援があったら活動しやすかったみたいなポイントなど、思いつく方がいれば、最後にお一人だけにお答えいただきたい。

こういうふうに関所が動いてくれたらよかったですか、組織が動いてくれたらよかったですかありますか。

せっかく首長の皆さんも聞いていただいているので。

(挙手あり)

宮下さん、いいですか。

群馬県 労働政策課 宮下 智 :

僕は一番ありがたいのは、副業を認めるというか、積極的にやっていたよってのを組織として打ち出してもらえるとうざいありがたいと思う。

外に飛び出すことがうちの自治体のスタンスなんだっていうのを明確に打ち出してもらえると、他の職員の飛び出した人に対する見る目も変わるし、組織として推奨するっていうのはすごくバックアップになるのかと思う。

コーディネーター 奈良県生駒市職員・(株)HOLG 代表 加藤年紀 :

ありがとうございます。

皆さんのトークセッションはここまでとなりますが、地域活性化センターの椎川理事長がいらしますので、今のセッションの感想をいただきたい。

一般財団法人 地域活性化センター理事長 椎川忍 :

県庁職員の方が 2 人、市役所職員の方が 1 人ということで、今回ちょっと意外でした。県庁職員の方っていうのは、住民からかなり距離があって、なかなかこういう活動をしにくいって人が多いんですが、今日はお二方が大変素晴らしい活動をされているので感心した。

もう話の中に出ているが、地域に飛び出す活動っていうのは、いろいろな形があっていいと思う。

森田さんのように、自分の仕事と関連する分野で、ミッションを凝縮して社会に貢献していこうとするのも一つの形。他のお二方のように、少しライフワークとか趣味も含めて、あるいは自己実現といった形でやっていくのも一つだと思う。

いずれにしても、この活動をすることによって、役所の中っていうのは非常に世間の常識とはかけ離れたことがいっぱいある。

たとえば議会対策や、人との議論、付き合いの仕方であたりっていうのは、かなり特殊な世界。

そのことが、住民の意識と公務員の意識を乖離させる一つの原因になっている。

そういう意味で公務員でありながらも、世間常識とずれのない、ごく一般的な住民の皆さんの気持ちもよく理解できる公務員が育っていったらいいなと思って、この運動を始めた。

狭い社会から飛び出ることによって、人脈や繋がりが飛躍的に拡大する。

そのことが、仕事に役立つ場合も当然出てくるし、自分の人生が豊かになるということも起きてくるし、さらにそういう公務員がいるんだなということによって公務への信頼感を増すことにもなるし、あるいは役所に対する信頼感も高まることになる。

自分の業務外の事でも、あの人が言ってるんだったらそういうことなのかなという、スポークスマン的な役割も果たしていける事にもなるんじゃないかと実は思っている。

本の中で、「公務員十戒」ということを言っている。肩書きがなくなっても、公務員でなくなっても、あるいは普段は役所の部長さんや、偉い公務員の方でも、地域に出掛けて行けば肩書きを外しても尊敬される人になって欲しい。

自分たちの狭い世界に閉じこもらずに、広い世界に飛び出して人脈を広げて欲しい。

仕事以外にプラスワンで社会貢献活動をしよう。

常に現場主義で住民サイドに足場を置いて、役所が住民と対岸にいて対峙する形で仕事をするのではなく、いろいろな悩みとか困りごととか苦しみとかいうものを、自分の問題として受け止め、行政としても解決していくような公務員でありたい。

そして、そのことが公務員の最終ミッションを忘れるなという、前の鳥取県知事の片山さんの言葉にも繋がってくると思う。

そういうことを進めて行くために、地域に飛び出す公務員活動が役に立つ。1 人なら単なる変わり者、変人ということになるわけであるが、横に繋がっていくことで、皆さんから勇気をもらい、横に連帯することによって社会的な評価も高まる。加藤さんのような活動もしていただくことで、世間からだんだんと評価されてきたんだと思っている。

ダイバーシティが大事だとか、ダイバーシティの中からイノベーションを生むとか、様々な事を偉い人が言っているが、役所の中のダイバーシティってどうなのかなということが根本にあると思う。

仕事は仕事としてきちとやらなければならないが、ものの考え方も、生き方もライフワークも社会活動も、様々なものがあっていいんじゃないかと。

それを古い時代には一つの型にはめて、こういう公務員がいいんだという既成概念があったように思うが、それを打ち破る時代が来たんだなとつくづく感じる。

今度、地域活性化センターの力も借りて、「平成が育んだ飛び出す公務員」、これは地域だけではなくて、民間に転職した方とか自営を始められた方とか、地域活動を熱心にやられている様々な方を、全国で

100 人選んで原稿を書いていただいて、本にまとめようとしている。

まさに平成の時代というのは、地方分権の時代とも言われるが、公務員の姿が変わってきた、そういう 30 年だったんじゃないかなというふうに私は思っている。

以上です。

コーディネーター 奈良県生駒市職員・(株)HOLG 代表 加藤年紀：

椎川理事長ありがとうございました。

公務員の幸せというキーワードが出てきたが、僕も公務員の幸せっていうのはもうちょっと注目されてもいいかと思っているし、今地域に出て行くことで繋がりが生まれるということが、幸福度調査の中でも幸福度を高めるといことになっているので、自分のためでもあり地域のためでもあり、外に出ていくということがすごく重要だと思う。

【首長会議】

司会 佐賀県小城市職員 坂田啓子：

これから首長会議に入ります。

最初に施策調査報告を行います。各自治体の皆様には、短い期間でのアンケートへのご協力ありがとうございました。

【地域に飛び出す公務員を応援する施策調査報告】

事務局 北海道東神楽町職員 小泉義隆：

地域に飛び出す公務員を応援する施策調査の結果について報告させていただく。

この調査は首長連合加入自治体の、地域に飛び出す公務員を応援する施策をとりまとめ、情報を共有することで、応援する施策がより効果的に広がっていくことを期待し、実施している。

資料 7 ページ以降をご覧ください。

今回の調査は、一つは昨年に引き続きの調査である、望ましい公務員の副業ガイドラインの参考状況や、それぞれの自治体における副業の状況、もう一つは第 1 回から第 3 回まで調査してきた地域に飛び出す公務員を応援する各自治体での施策について、首長連合に参加されている 57 自治体のうち、39 の自治体から回答をいただいた。

まず、副業に関する調査結果の『『公共性のある組織』での副業の許可等にあたり、ガイドラインを参考にしているか』という質問について、「参考にしている」と答えた自治体は 22 で、「参考にしていない」と答えたのは 17 の自治体だった。

「参考にしている」と答えた自治体の多くが、実際に申請や相談を受ける際の判断基準として活用されている。

一方、「参考にしていない」と答えた理由の多くが、すでに定めている基準がガイドラインの趣旨と大きく変わらないため、また参考にする機会がなかったため。

次に「ガイドラインを受けて副業に関するこれまでの基準の見直す等の取組みを行ったか」という質問について、「行った」と答えたのは 3 自治体、「行っていない」、または「検討中」と答えたのが、全体の 9 割となる 36 自治体だった。

次に、ガイドラインがさらに活用していただけるものとなるためのご意見として、活動の具体例を求めるとご意見や、報酬や謝礼などの具体的な金額提示を、というご意見があった。

今回の調査では、「認めている副業の事例」に掲げている 5 つの事例が多く認められていた。

自治体間でこの業務をどうやって認めているのか、この業務なら、どのくらいの金額かという情報交換をしていただくと、より具体的に活用していただけるのではないかと。

また、「こんなふうになれば、もっと副業しやすくなるのでは」というご提案については、「地域活動を積極的に行うことで、本業においてもプラスになることを役所側で認識し、その活動を正当に評価することができれば、有効なインセンティブとなり、自分もしてみたいと思う職員も増えるのではないかと」などのご意見があった。

次に、地域に飛び出す公務員を応援する施策に関する調査結果について、「自治基本条例などで、公務員が地域に飛び出すことをうたっている」施策があると回答したのは全体の 4 分の 1 である 10 自治体だった。

また、先ほどの副業の調査の中でも触れていた、「NPO、ボランティアや地域活動に参加しているかどうか」が人事評価の項目に挙げられているのは 7 自治体だった。

どのように評価に反映しているのか、お話をお伺いしたいところ。

「その他」の応援する施策については、4 自治体から回答をいただいた。

飛び出す公務員を表彰する制度や、奈良県生駒市からは副業許可の取り組み。

以上簡単ではあるが、施策調査報告とさせていただきます。

【首長会議】

テーマ「地域に飛び出す公務員を応援するために、首長連合として何ができるか」

司会進行 三重県知事 鈴木 英敬：

ありがとうございました。

それでは、今の調査結果の報告や、事例発表、トークセッションなどを踏まえて、今後、首長連合として何ができるか、何がしたいか、ということ为首長の皆さんからご意見を賜りたい。

最初に、岐阜県飛騨市長の都竹市長にお願いしたい。都竹市長には、今年 11 月にご勇退された谷畑前湖南市長のご後任として、首長連合の代表代行にご就任いただいている。この場をお借りしてお礼申し上げるとともに、お集まりの首長の皆さんに改めてご報告を申し上げたい。

岐阜県飛騨市長 都竹淳也：

今日の 3 人の発表では、仕事上の気づきとか必要だと思うところを、問題意識として大事にしながら、自分の生活の中の活動にシームレスに繋がっているところが大変素晴らしいなと思ったし、地域に飛び出す活動自身が自己肯定感を高めていくことに繋がっていると改めて感じた。

私も岐阜県職員時代に「鶏ちゃん合衆国」という活動でアワードを頂戴し、市長になってもやっているが、市民と対する時にまた違うポイントが出てくるので、大事だと思う。

それから、兼業・副業に関しては、私どもも、昨年 2 月に作った兼業に関する規則において原則許可するというので、市のデマンドタクシーの市民ドライバーをやる職員とか、職員が NPO の役員をやっている、その NPO が市の指定管理を受けているなど、いろんな面白い事例に取り組んでくれている。

首長連合を通じて、こうした事例において、報酬の金額とか、皆さんが共通して知りたいところを深掘りしていくと、大変意義あるものになると感じている。

司会進行 三重県知事 鈴木 英敬：

ネガティブリストだとそれに当てはめるの大変だが、原則許可というのはいいと思う。その上で事例の深掘をおっしゃっていただきありがとうございます。

それでは、山本北海道東神楽町長。

北海道東神楽町長 山本 進：

副業とか、地域に飛び出すということに対して認める環境になってきたのは、飛び公の成果だと思っている。当町では、現在コロナの中でイベントがちょっと萎縮気味のところがあるので、せっかくの機会にいろいろとアイデアとか、エネルギーを溜め込んで、明けた後に存分に発揮できるような環境を作っていきたい。都竹市長のお話にもあった兼業の原則許可というのは非常に参考になるので、制度化も含め頑張っていきたい。

司会進行 三重県知事 鈴木 英敬 :

この兼業を認める雰囲気がこの飛び公の成果だと山本町長にもおっしゃっていただきありがとうございました。それでは片山北海道二セコ町長。

北海道二セコ町長 片山 健也 :

公務をいかに住民自治の中に溶け込ますかを考えて、いろいろ今改革している中で、この7月に「株式会社二セコまち」を設立した。

SDGsの推進を初め、住民の中に公務自体を溶け込ませていって住民自治を活性化させようという意味で、役場から38%を出資している。新たな第二役場、ゆくゆくは10年後には第一役場が消滅をして第二役場が政権を取るとい社会になるかなと思う。

今後も多様な働き方を検討したい。

司会進行 三重県知事 鈴木 英敬 :

第二役場はなかなか激しい、良い感じですね。

小紫さんや僕が霞ヶ関にいる時は、第二霞ヶ関やってやるかぐらいの感じでやってたので懐かしい思いと、首長でやっておられるのはすごいなと。

では、白岩山形県南陽市長。

山形県南陽市長 白岩 孝夫 :

お三方の大変素晴らしいお話を聞いて感じたのは、同僚の職員の理解や、職員以外の多くの人に知ってもらうということの大切さ、そして、我々首長連合としては、褒めることが大事だと思ったところ。

南陽市では令和2年度から、初めて新採職員研修で、地域に飛び出してみようという科目を作り、昨

年、南陽市でのサミットの際に飛び公の実践例、「南陽宣隊アルカディオ」のメンバーが講師になったり、市長・副市長講話で飛び公の話をするようにしている。

話はそれるが、昨年、山形県出身の女優で愛人キャラでも知られている、橋本マナミさんと一緒に写真を撮らせていただき、すごく嬉しかった。もし様々な観光大使とかを務めておられる芸能人の方とかでコネがあって、飛び公の皆さんが求めるファンの方がいれば、一緒に写真を撮れる券とかがあればいいかなと。

司会進行 三重県知事 鈴木 英敬 :

白岩さんの話は、最初に首長が真面目に褒めるのが大事だということを実現化した話だというふうに思いますし、新卒の魂百までじゃないですが、しっかり飛び出していくことの意義を伝えるということの重要性もおっしゃっていただきました。

それでは大川栃木県栃木市長。

栃木県栃木市長 大川 秀子 :

私の友人の飛び公だった職員が、退職をした今も率先して地域活動に貢献されている。その一方で、高校生をはじめ、市民活動が大変活発で、若者、女性たちが起業する方々が、とても多く出てきている。また、市の職員と一緒にいった組織「プレイヤーズミーティング」には、私も参加をさせていただいており、これからが楽しみ。

そういった職員をいかに増やしていくかが大切であるとともに、先ほどのアンケート調査の中であった、社会貢献活動、NPO 活動、ボランティア活動を人事評価に入れていくという話も今後やっていければいい。

市民活動が活発になっている中、コロナ禍で、人との関係が分断されているが、やがて収束したときにはぜひコミュニティの超回復を図り、強いコミュニティを作りたい。

司会進行 三重県知事 鈴木 英敬 :

人事評価に組み込んでいってそういう職員を増やしていこうということが大事であるということをおっしゃっていただきましたし、起業する方って、いろんなことの整備が大変なので、市の職員が、一緒に伴走型で入っていけるというのはすごく良いことじゃないかなと改めて思わせていただいた。

それでは、荒木群馬県桐生市長。

群馬県桐生市長 荒木 恵司 :

2019年の春の統一地方選で出馬した時の選挙公約の中で使った「現場に神宿る」という言葉。全ての問題解決の糸口や将来に向かっての発展の可能性のヒントは、現場の声にある。また実現するのも現場の人にあるという意味で、就任してからも、職員に計画や施策を作る際に必ず現場に行き、声を聞いてから作り上げるようにと指示をさせていただいている。

また、桐生市では、シェアリングシティの認定を受けており、公助から共助へということで、地域が持っている財産を有効に活用し、地域の助け合いを補完するという活動をしているほか、base on the green、公共空間を利用して利益を生み出す、公民連携のイベント等も、職員が群馬県庁の宮下さんから色々とアドバイスをいただきながら、地域の人たちと行っている。

各種団体が同時多発的に、いろんなところで多くのイベントをやるというのが桐生市の特徴。公務員が当然外に出ていろんな方々の意見を聞いて物事を進めるのが基本だと思っているので、皆さま方のご意見等を拝聴させていただき、桐生市に有用性が生まれる取り組みが出来たらいいと思う。

司会進行 三重県知事 鈴木 英敬：

荒木市長、「現場に神宿る」めっちゃめっちゃいい言葉ですね。

私も知事を10年やらせていただいているが、意思決定をする時に現場の風景が思いつくかどうかというのを一番大事にしており、現場に神宿る、まさにおっしゃる通りだと思います。

規制緩和も進んでいて、三重県も去年のうちから道路部局と警察と保健所と、ワンストップで道路占用許可を受ける協議会を作って、すぐにイベントをどんどんできる仕組みを作ったりして、国の規制緩和も進んでますので、どんどん利用できればいいと思います。

それでは、小坂千葉県酒々井町長。

千葉県酒々井町長 小坂 泰久：

この会議が非常に有意義だなと思って感動しながら聞いていたが、私どもの町も飛び公をやろうという職員が少ないので、いかに参加させるか。

私自身は、地域のごみ清掃から始まって色々ずっとやってきているが、今は行動力がある職員が比較的少なく、机上で仕事をするような人が多い。

たまたまうちの町も若い職員が少し多くなってきたので、現場に出てくる人間がその気になる、その気にさせていけるよう、いろんな事例を職員研修等に活用しながら少しでも多くの参加を目指していきたい。

司会進行 三重県知事 鈴木 英敬：

小坂町長におっしゃっていただいた若い職員が増えてきたのは、新陳代謝でそうなったということですか。

千葉県酒々井町長 小坂 泰久：

はい。団塊の世代が退職して、その後に若い人を採用してきているというような状況。職員の半分以上が新しい人になってきている今からが、本当に飛び公を仕込んでいく時かなと。

上の方がそういうことをしないと、若い職員は上を向いて動かないというところがあるので、それをうまく仕込んでいきたいなと考えている。

司会進行 三重県知事 鈴木 英敬：

若い職員が増えてきたので、研修で事例を展開していくという、まさにやっておられる事が職員の構成と整合性があるなというふうに感じさせていただきました。

それでは牛越長野県大町市長。

長野県大町市長 牛越 徹：

山岳文化都市でもある長野県大町市は、15 年近く「市民の参画と協働のまちづくり」を進めている。市職員には、率先して地域に出ていく、つまり市政（行政）と地域の橋渡し役を担っていくようにと奨励しており、実際に地域の自治会や、自主防災会などの市民活動、あるいは地域活動や、文化スポーツ団体の役員を務めるなど、盛んに地域に飛び出しており、市役所の信頼度に大きく寄与している。また職員にとっても、いろんな人とのネットワークの中で、自らの力量を高める機会になっているのではないかと考えている。

そうした中で、やはり収入が伴うような副業として、地公法の 38 条の規定に沿って許可するような形で、登山案内人組合に所属して、北アルプスに登る方の登山・案内・指導活動をする。あるいは市内のスキー場でスキースクールの指導員を担当するようなことも事例としてある。

地域に根ざした地域活動に、市の職員も地域の一員として取り組むような基盤をしっかりと作って行きたいということで、長野県としても制度を作っていただいているので、それをお手本にしたい。

司会進行 三重県知事 鈴木 英敬：

単純に地域に飛び出していだけじゃなくて、果たしている役割が、先ほどの登山の案内人とかスキースクール指導員ということで、まさに市長が冒頭おっしゃった山岳文化都市という、市全体の目指す方向性を具現化している。顔が見える形でその職員の皆さんが行ってもらっていることは、飛び出している上に、市全体のビジョンの推進にもつながる一石二鳥ということで、その飛び出す場所についても非常にご示唆のある事例だった。

続きまして、柴橋岐阜県岐阜市長。

岐阜県岐阜市長 柴橋正直：

岐阜市では、3年以上、実際に自治会とかボランティア活動に一生懸命励んでいる職員に対して、私が直接バッジを渡して表彰する制度を作っている。地元の新聞にも大きく取り上げられ、地域に飛び出して頑張っていることを、広く市民の皆さんにも知っていただき、職員の励みにもなったかなと思う。

そうは言っても全体で言うと、今年度が43人、昨年度が38人。今日お話いただいたような事例も参考にしながら、この制度に賛同して一生懸命、公務以外でも頑張る職員を地道に広げながら増やしていきたい。

面白い事例では、岐阜市内に水族館はないが、水族館のボランティアをやっている職員がいる。お客様向けの説明が実際に仕事での市民の皆さんとのコミュニケーションに繋がってきたり、こっそりご家族が様子を見に来ていたことも励みになったりしている。

もう一つ、鈴木知事に報告がある。去年の南陽市サミットでご紹介があったこのワーク・ライフ・マネジメントシートを岐阜市でも採用した。

私と現場の管理職と現場の職員が、公務以外でどんな目標を持っているか、飛び出してどんなボランティア活動をやっているか、率直に話し合うきっかけができた。まさに飛び公になりたい職員が、気軽に飛び出していけるような職場全体の雰囲気作りにもなり、鈴木知事に感謝している。他の自治体でも参考にしていきたい。

こうやって職員がどんなふうに飛び出しているかという情報を共有しあう事は本当に大事なので、一緒に飛び出して行きたいと思う。

司会進行 三重県知事 鈴木 英敬：

表彰状を1回渡すだけじゃなくて、バッジだと日頃からつけて、やった思いをずっと日々毎日持ち続けることができる、そういうちょっとした工夫ですけども、非常に良い工夫だなと改めて思った。水族館のボランティアは、岐阜の外に行ってるんですか。

岐阜県岐阜市長 柴橋正直：

名古屋港水族館にっているらしいです。

司会進行 三重県知事 鈴木 英敬：

なるほど、飛び出して市外にも行ってしまおう。

名古屋港水族館も非常にプレゼンが上手な水族館ですから。

三重県が平成 26 年から取り組んでいるのワークライフマネジメントの話ですが、ワークとライフのバランスを取るというよりは、ワーク頑張りたい時、ライフ頑張りたい時、それを高度に自分なりにしっかりマネジメントしようというシートを作って、一人一人が現場で定着するようにやっている。

続きまして、吉岡愛知県高浜市長。

愛知県高浜市長 吉岡 初浩：

私ども 13 平方キロの小さな町で 5 つの小学校区があり、その 5 つの小学校に担当職員を派遣している。会議の中で出来上がった事業については、ほぼボランティアで参加する。それが即、自分が新たに NPO を作ったりだとか、仲間と事業を作っていくところまでは発展していないが、それが地域に飛び出していききっかけとなっている。

今日ご参加のまちの中にもその仕組みがあるかわからないが、仕事を通してきっかけづくりはすごく大事で、それを通して地域の間関係が、市の財産、職員の財産にもなっていく。またそれを評価に繋げることも併せて行いながら、職員を応援していくことが非常に大事だと思っている。

それから、副業を明確に組織として認めていく、制度として作っていくということは、今日改めて重要なことだなと感じさせていただいた。

司会進行 三重県知事 鈴木 英敬：

小学校区に担当職員を置いて、仕事を通してきっかけ作りをしていくことが職員の財産にもなっていくんだと。それが、評価にも繋げていっているの、きっとそれは組織の財産にもなっているんだろうなと思いました。

それでは、岡村愛知県大府市長。

愛知県大府市長 岡村 秀人：

「地域に飛び出す公務員を応援する」ことを公約にして当選し、現在、地域活性化センターに職員を 1 人派遣している。

大府市の「協働のまちづくり推進条例」には、市民、事業者、自治会、NPO の役割しか規定されていなかったもので、市長就任後、直ちに条例を改正し、職員も市民としての役割を果たすべきだという規定を盛り込んだ。

そして、毎年職員には報酬の有無を問わず、地域貢献活動を積極的に行うよう呼びかけており、人事評価の目標管理シートや職員の採用試験の際にも、地域貢献活動についての記載欄を設けている。

課題は、ボランティアを認める規則はあっても、要件が大規模災害等に制限されており、ボランティア休暇をなかなか取得できないので、工夫が必要。

最後に、今日も若い人の素晴らしい地域貢献活動を聞かせていただき、若い人がこれらの活動によって成長していくことも大切だが、人生 100 年時代を迎え、知識や経験をたくさん持っている中高年の職員にも積極的に働きかけていくと良いと思っている。

司会進行 三重県知事 鈴木 英敬：

ありがとうございました。

条例に職員の役割を規定し、市の大方針としてしっかり打ち出して頂いた。

規定として盛り込んでほしいと思う職員と、思わない職員もいたかもしれないが、その中でも岡村秀人市長のリーダーシップで盛り込まれたんだと思う。

また、休みを取りやすいような工夫も非常に重要。休暇制度みたいなものでもいい。三重県でも、変わった休暇として、全国で一番最初に行った、特別養子縁組の職務専念義務免除がある。特別養子縁組を組むとき、6 歳未満だと 6 ヶ月間の試行期間が必要で、育休が取れないとマッチングが難しい。

様々な方法で臨機応変に対応できると思うので、休み方の工夫や制度などもみんなで共有していければありがたい。中高年のデビューということも大事だなと改めて思った。

次に吉村大阪府富田林市長。

大阪府富田林市長 吉村 善美：

富田林市は、現在 NHK の朝の連続テレビ小説「おちよらん」のヒロインでモデルとなっている浪花千栄子さんの出身地。

私は去年からこの地域に飛び出す公務員を応援する首長連合に参加しており、去年は南陽市 白岩孝夫市長にも大変お世話になった。

この地域に飛び出す公務員は非常に大事だと思っており、市民の幸せや幸福を成せる技として、感動や成功体験を職員の皆さんに進んで行ってほしくて、今発信をしている。

コロナの中でも、窓口にこられた方に親切丁寧に、自分の家族だと思って対応するよう話をしている。

また、「他喜力」として他者を喜ばせる力、そして「他思力」として他人を思う力を職員として養おうと言っている。

職員はスポーツ活動の指導員や、文化芸術活動のボランティアをはじめ、コロナ禍でデリバリー・宅配等を行っている店舗を紹介する SNS コミュニティをつくるなど、様々な形でボランティアを行っているので、首長や行政は発信組織としてこれらの活動を共有するということに力を入れて取り組んでいきたい。

司会進行 三重県知事 鈴木 英敬：

ありがとうございました。

「他喜力」という、大変いいお言葉をいただいた。

南陽市 白岩孝夫市長も、多くの人に知ってもらうことが大事だとおっしゃっていた。生駒市 小紫雅史市長の講演でも、説得力を向上させる意味でも発信が大事だとおっしゃっていた中で、富田林市 吉村善美市長からも同様のことをおっしゃっていただきました。

それでは、多次兵庫県朝来市長。

兵庫県朝来市長 多次 勝昭：

首長の方々、大変ご無沙汰しています。

私も第1回のサミットから参加し、第4回は本市で開催した。

ただ、7～9回目の開催分の3回については、私用に参加できなかったことを大変申し訳なく思っている。

私も3期12年の12年目を迎え、政治信条として「対話を中心とする心優しいぬくもりの市政の実現」をもって、今日まで市民目線を大事にしながら市政運営をしてきた。

公務員と市民が離れては自分の思いの政治ができないということで、地域に出ながら市民の生の声を聞き、どう反映させていくのかというのが一番の根底にあった。

今日のサミットの中でも副業等の話が出てきたが、朝来市では、まだまだそこまでは至っておらず、講演、あるいは執筆といったような事にとどまっている。

従って、これまで同様にしっかりと地域に飛び出し、公務員の袴を脱いで、市民のかたと同じ目線に寄って、いろいろな意見を戦わせ、拾いあげてくるという対応をしてほしいと思う。

消防団の団員も同様。小学校単位で設置している地域自治組織へ派遣している職員にも、地域の中での存在感を示すようにと伝えている。

10回目のサミットを迎え、地域に飛び出す公務員のありよう、考え方についても若干変わった部分もあるのかなと思う。

朝来市で認めているのは講演や執筆に留まっているが、今後、幅広く職員の地域貢献のバックアップをしていきたい。

なお、私事で大変申し訳ないが、3期目の任期が今年5月で終了するにあたり、健康面の心配もあるため、3期をもって退任したいと思っている。

次回のサミットでは新首長の参加になると思うが、この姿勢はしっかりと引き継いでいきたい。今後ともこの朝来市をお忘れなきようによろしくお願い申し上げるとともに、さらなるご指導賜りますよう、お願い申し上げます。

司会進行 三重県知事 鈴木 英敬 :

ありがとうございました。

朝来市 多次勝昭市長からは、最後に政治家の出处進退という大変重い決断をされた。このサミットの1回目からご参加いただき、その姿勢を次に引き継ぐという大変力強く、我々にとっても身の引き締まるお言葉を賜りまして、本当にありがとうございました。

副業のありようや飛び公の中身のありようが変化している中で、変化に合わせて考えていかなければならないという言葉いただいた。

対話と生の声を中心にやってくられた市長ならではの、1回目から参加いただいたならではのお言葉だったと思います。

それでは、仲川奈良県奈良市長。

奈良県奈良市長 仲川げん：

知らない間に回を重ねて参加もせず申し訳ございません。

様々な条例化や人事評価など、我々も参考にさせていただきたい。特に隣の生駒市では人材育成や地域の参画など、奈良県内でもリーダーシップを発揮していただいております、県内でも横展開を進めていきたいと思う。

最近 SNS などにより、地域で活躍する職員の様子を見た学生が、新規採用や中途採用も含めて市役所を受験し、次の飛び出す公務員を呼び込んでみたいサイクルが出てきている。

そういう意味では 2 回転目、3 回転目に今入り始めてるのかなと思う。当初の飛び出していたような人がもう定年退職して、本物の地域人材として活躍するというサイクルも出ているので、地域の財産だなと思った。皆さんと連携を深めて行きたいと思ってますので、よろしくお願ひしたい。

司会進行 三重県知事 鈴木 英敬：

飛び出している公務員を見て、また次の採用に繋がるといふ回転ができてくれば、また役所の組織自体のレベルアップにもつながっていくでしょう。

三重県職員であった山路も定年退職し、地域で頑張っているのだから、そういうメンバーがどんどん出てくるのかなと思う。ありがとうございました。

それでは、半渡宮崎県木城町長。

宮崎県木城町長 半渡 英俊：

事例発表の 3 名の発表を聞き、すごい人がいるもんだなと感心すると共に、地域資源や地域課題に目を向け、賑やかな夢を持ちながら自分でできる範囲で、愉快的仲間や共感者を巻き込みながら地域に飛び出して活動しているという事に感服した。

改めて、活動のフィールドは無限大だと気付かされた。

私たちは、こういう公務員を一人でも多くの住民に知らしめ、発信することも大事。また、できる範囲で褒美もあげるべきではないかなと思った。

木城町は田舎で小さい町で職員 98 名の仲間がいる。

地域に飛び出す前に、地域に放り出されているような町。

ただ、職員の中には温度差があるので、地域貢献や社会貢献のための地域支援員だということを常々言っている。

そのような職員が 1 人でも熱い脈やかな夢と、地域課題に進んでチャレンジしていく公務員となるように、環境整備を図っていきたい。

司会進行 三重県知事 鈴木 英敬 :

ありがとうございました。

今日は職員の皆さんも一緒に見ていただいているんですか。

宮崎県木城町長 半渡 英俊 :

はい。98 名の職員の中で、中心メンバーの 10 人です。

司会進行 三重県知事 鈴木 英敬 :

職員の中でも展開していきたいという事で、実践をしていただいていることは本当にありがたいと思います。

半渡町長からも、首長自身が、頑張っている職員を住民へ発信していくというのもやっていかなければならないということもおっしゃっていただきました。

ありがとうございました。

では最後に、開催地の小紫奈良県生駒市長。

奈良県生駒市長 小紫 雅史 :

各首長のお話は参考になることがたくさんありました。

発表いただいた3名も大変面白くて、生駒市でもやりたいと思う具体的な事例もたくさんありました。

自分自身がまちを楽しむ姿勢を見せることが職員の背中を押す第一歩であると思い、これまでやってきた。

私も、流しそうめんやゴミ拾いなど職員がまちに飛び出したところとか、市民が初めてイベントを実施するようなどころには、きめ細やかに行き一緒に楽しむことができました。そのことで、そういう方々の背中を押したことになるだろうし、私自身が市長としてのエネルギーにさせて貰っているところがとてもある。

ここにおられる首長さんや職員の皆さんは、コロナで仕事量や判断事項が増えて、とてもしんどいと思う。しかし、それ以上に辛いことは地域に行けずに地域の皆さんとコミュニケーションをとれないこと。

市役所での月から金曜日の仕事の中には、楽しい仕事や面倒くさい仕事、後ろ向きな仕事もある。そんな中で、土、日曜日に前向きな市民の皆さんや職員が地域に飛び出しているところに行きエネルギーをもらうことで、また1週間頑張ろうという気持ちになり、そのサイクルを続けてきた。

それが、副市長、市長になって初めて土日両方休みになった。

家族との時間が増えたのは良かったが、日に日に自分の元気がなくなっているのが分かった。初めて、心が折れそうになった。

秋に少しだけ地域に出て一息ついたが、現在第三波で、自分がどこまで行けるんだろうというギリギリの戦いをしているような感じ。

終息すること、その先には超回復があることを期待し、何とか乗り越えていければと思う。

最後に職員や首長の皆さんへのお願いですが、職員の顔と、一市民の顔をうまく使い分けてください。「職員だから副業でお金をもらってはいけない」「市民に寄付を求めてはいけない」など、固定概念が根強くしみ込んでいる。

また、自分たちが頑張っていることはあまり市民にPRしないという風潮も刷り込まれているような気がする。

そういったものは、全部取っ払ったらいと思う。

「こんなに頑張ってるので、市民の皆さんも一緒にやろう」という方がまちが幸せになるのに、市役所の職員が頑張っていることを発信するなんてはしたくない、という文化があるような気がする。そういう殻を取っ払っていくことが必要だ。

首長さんからそういうことを言わないといけないと思うし、ここにおられる職員はリーダーだと思う。ファーストペンギンは一番傷をたくさん負うのですが、その役にあえて飛び込んでいただきたい。

皆さんがファーストペンギンでボロボロになりながらも、まちを楽しんでいるという姿を見せてあげれば、次に続く職員も出てくるし、そういう職員がたくさんいること自体がまちのブランドを高めていくと思う。

生駒市は採用を頑張っていますが、最後はその自治体にどれだけ面白い人がいるか、面白い取り組みをしているか、地域に飛び出して、従来の自治体じゃないようなことをやってるような人がどれだけいるのかが採用活動の成否の決め手になる。

語弊を恐れずに言うと、次の生駒市のまちづくりを担う人をどれだけ集め、どれだけ力を発揮してもらえるかが首長の一番大切な仕事だと思う。

特に若くて感度の良い素晴らしい方などで、まちに飛び出してくれそうな人に生駒市を受けてもらい、採用できるよう、コンテンツの中身の部分を作っていくのが大事だ。

そういう思いで、先ほどのプレゼンのお話など、全部やってきてるつもりです。

一部の議員などからは「地域に飛び出すことを人事評価に入れるなんて生駒市はどうなんだ」などと言われているが、胸をはって地域に飛び出せば良いんです。

また明日からそれぞれの自治体で、戦いもあるだろうけど、皆さんこういう場所でエネルギーをチャージして、明日からの戦いへの力にして帰っていただければと思います。

司会進行 三重県知事 鈴木 英敬：

ありがとうございました。

今日皆さんのお話をお伺いさせていただいて、職員が飛び公での実践事例を共有したりパクったり、深掘りしたりしていくことが重要であるという事が共通認識となった。

加えて首長自らが、飛び公で頑張ってくれてる職員の様子を発信することや、表彰をはじめ、職員に対してその行動が良い事なんだと率先して示していくことも重要であるという共通認識があった。

また、生駒市の小紫雅史市長から「超回復」というキーワードをいただきました。

今年で東日本大震災から 10 年目を迎える。

東日本大震災においても、「ビルドバックベター」として、前よりもより良くということをして日本全体でやってきた。

このコロナにあたっては、「超回復」ということで、今日みんなでコンセンサスが取れたと思う。

私が最近読んだ致知出版の『人望力』という本がある。

「人望」を辞書で調べると、「他者からの信頼や尊敬を集めている状態」。

そして、人望力は私心を抑えて行動することによって出てくると書いてある。

行動がないと出てこないということで、市民の皆さんから尊敬信頼されながら、市を町を良くするために頑張っていくためには、行動なくしてあり得ない。

今日の首長のメンバーも職員も、それを実践されてる方々だと思うので、ぜひ皆さんと手を携えて頑張っていきたい。

それでは以上をもちまして、首長会議を閉会とさせていただきます。

本日はどうもありがとうございました。

司会 佐賀県小城市職員 坂田啓子：

どうもありがとうございました。

「超回復」、「人望力」、行動すること、心に刺さるキーワードが飛び交っておりました。

次の開催地である宮崎県木城町からご挨拶をお願いします。

宮崎県木城町長 半渡 英俊：

新型コロナウイルス感染症が収束すると共に、夜なべ談義ができるように願いながら、令和3年度は木城町で開催させていただきます。

今までの開催地とは異なり、国道や鉄道もないという無い無いの町だが、思いはたくさんあり、いろんな気づきをいっぱいいただきたいと思いますので、ぜひ、木城町にお越しください。

なお、宮崎空港からは約1時間ですので、案外来やすいのかなと思う。

木城町でお待ちしております。ぜひお越しください。

司会 佐賀県小城市職員 坂田啓子：

どうもありがとうございました。

初代代表が佐賀県の古川知事で、サミット 11 年目にして初めての九州開催となります。
私も九州です。

チャットでも、ハイブリッド開催として、オンラインとオフラインと合わせた開催もありですねというコメントもあり、より多くの方が参加できればと思います。

これまでのサミットのうち、北海道東神楽町での開催だけ欠席されて、ずっと参加をしてくださってました前代表代行の谷畑湖南市長が今日来てくださっています。

進行についてもすぐご尽力をいただきました。
せっかく来ていただいておりますので、一言お話をいただけたらなと思います。
谷畑英吾さんよろしく願いいたします。

前滋賀県湖南市長 谷畑 英吾：

谷畑でございます。
このたびは勝手にいたしまして誠に申し訳ございませんでした。
また、今回 10 回目ということで、皆様に御礼を申し上げたい。

特に鈴木知事には代表をお引き受けいただきましてありがとうございました。
リアルでお誘いできずに誠に申し訳ございませんでした。

先ほど生駒市の小紫市長がおっしゃったように、一番厳しいのは、コロナで住民と触れ合えなかったこと。
公務員の皆さんが地域に出て、代わりに支えていただくことが大事だと思う。

自治体情報化システムの標準化法が今国会に出る。リアルに接する部分については、地域に飛び出す公務員がしっかりと支える。IT 化によって、地域に飛び出すための時間を作っていくことが大事になる。

特に、明日は平成 7 年に起こった阪神淡路大震災の日。
明治の「天皇の官吏」がだんだん遠ざかり、地域が中心になっていっている感じがするので、地域に飛び出

す公務員を支えていく首長連合の役割は、これからも大きくなるものと心から期待している。

また、多次市長も今回ご引退ということで、こちらの側に来られるということなので、首長連合のお約束のよ
うに、生涯にわたって飛び出す公務員と一緒に応援していければなと思う。
ありがとうございます。

司会 佐賀県小城市職員 坂田啓子：

どうもありがとうございました。

朝来市の多次市長も私たちのことを支えていただければと思います。

福島県聴覚障害者協会の方には、UD トークでの対応をありがとうございました。

また、初めてのオンライン開催ということで、三重県や生駒市の担当の方には夜遅くまでありがとうございました。

少しトラブルもあったかと思いますが、無事終わりましたことをお礼申し上げます。

これもちまして「第 10 回地域に飛び出す公務員を応援する首長連合サミット in 奈良県生駒市」の全
ての日程を終了いたします。

長時間のご参加、皆様ありがとうございました。

また来年、ぜひお会いいたしましょう。

さようなら、ありがとうございました。

サミット閉会